地域情報（県別）

【京都】研修医目線で変えた「屋根瓦」勉強会に全国が注目-堀田祐馬・京都府医師会理事に聞く◆Vol.2

指導医の学び直しプレゼン「Re-1グランプリ」に100人が来場

2025年12月15日 (月)配信 m3.com地域版

「もっと、若い医師に刺さるものにできるはず」――。2021年から京都府医師会で理事を務める堀田祐馬氏は、医師会の勉強会にスタッフとして参加して複数の課題を感じたという。タイトルの改名、人材の調整、チラシの刷新などを行って生まれ変わった「臨床研修屋根瓦塾KYOTO」は現在、全国から研修医が参加し、府外の医師会・病院が開く勉強会のモデルにもなっている。「研修医目線」を生かすために立ち上がった有志の活動に注目した。（2025年11月4日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら
▼第3回はこちら（近日公開）

堀田祐馬氏（本人提供）

徳洲会や民医連にも周知、全国的注目を集めるように

――堀田先生は京都府医師会が主催していた勉強会「研修医のための研修と交流会」にスタッフとして参加するようになり、運営のあり方に複数の課題を感じたといいます。

スタッフのモチベーションにばらつきがあり、人が毎回入れ替わることで企画運営のノウハウが蓄積されていませんでした。「研修医のための」という表現にはどこか上から目線に近いものを感じ、制作しているチラシのデザインも若い医師の関心を引きづらい印象を受けました。それでも、参加した研修医の感想は悪くなかったんです。「内容が良かった」「とても勉強になった」と話す人が多かったので、見せ方やスタッフの質を改善すれば、もっと参加してもらえるものになるのでは、と思いました。

そこで、勉強会のタイトルに先輩・後輩が共に学び合う様を示す「屋根瓦」を入れて「臨床研修屋根瓦塾KYOTO」と改名し、チラシも武骨なものからキャッチーなものへと刷新しました。スタッフ体制もノウハウが蓄積していきやすいよう、他院を含めて私の周囲にいる教育熱心な先生方に継続して参加していただくようお願いしました。

スタッフの人選や勉強会の周知については、この時も市立福知山市民病院の元院長で現名誉院長である香川惠造先生からアドバイスをいただきました。京都府北部からの参加が多いことを指摘され、「京都府医師会として開くのであれば、もっとバックグラウンドが多様でなければならない。そうでなければ医師会でやる意味がない」と言われたのです。「確かに」と納得した私は京大系や府立医大系だけでなく、徳洲会グループや民医連（全日本民主医療機関連合会）の加盟病院の先生方にも積極的にスタッフとしての参加を依頼するようになり、診療科も内科系や救急だけでなく幅広い科から参加していただくように配慮しました。

チーム対抗で症例クイズに回答、年2開催でキャンセル待ちも

――その動きが、京都府医師会で若手医師支援を担うグループの設立につながっていったのですね。

そうです。継続的に医師会に関わってくれる人たちをグループ化しようという動きが自然と生まれて、2016年に「若手医師ワーキンググループ」が立ち上がりました。ボランティアに近い有志の団体です。スタッフの質を維持する点では、臨床研修屋根瓦塾KYOTOに参加してくれた研修医の中で良さそうな人やアンケートで私たちの活動に「参加してみたい」と書いてくれた人などをリクルートするようにしました。この仕組みによって、「屋根瓦塾に参加した研修医が数年後、スタッフとして参加する」という好循環ができました。

現在のメンバーは約10人で、出身大学や所属する診療科は多様です。部活のような雰囲気で楽しく取り組んでおり、現在のリーダーである京都府立医科大学の松原慎先生の発案で2024年春ごろからウェブミーティングを月1回の定例にし、さらに一体感が高まりました。メンバーの多くは自身の所属する病院で教育活動を行っており、それを地域でも展開したい思いを持っています。私の印象では、30～40代で教育的なマインドを持っている人は多くなく、むしろ少数派。場合によっては院内で「ちょっと変わった人」と見られるケースもあるので、同じ志を持つ人たちとつながれる場があることに意義を感じてくれているのではないでしょうか。

――資料によると、臨床研修屋根瓦塾KYOTOには現在、全国から研修医が参加しているほか、府外の医師会や病院がこの勉強会を参考にして同じようなイベントを開いています。日本医師会のシンポジウムでも活動が紹介されました。

「研修医が研修医の目線で学び合う」をテーマに、チーム対抗で症例クイズを解く形式を導入しました。異なる病院の研修医4人ほどが一つのチームをつくり、京都府医師会館の会場に設けられた八つのブースを回り、それぞれのブースにいる指導医が出すクイズに答えて正答率を競い合うものです。

現在は夏と冬の年2回開催で、ここ2年はいずれも定員が埋まりました。夏は約50人、冬は約30人が参加しており、キャンセル待ちも出ている状況です。

「屋根瓦ワーキングチーム」医師会の正式な組織に

――若手医師ワーキンググループはこのほか、若手指導医によるコンペティション「Re-1グランプリ」を京都医学会で開催しています。

京都府医師会が年に１回開いている京都医学会で、「何か目玉となる企画ができないか」「人を集められるものをつくりたい」という狙いの基にできたのが、「Re-1グランプリ」です。最初は「コンペティション形式のショートプレゼンテーションはどうか」と私が発案したのですが、それだけでは弱いだろうと松原先生が「学び直し」をテーマに絞ると良いのでは、と提案してくれました。医療の世界もリエデュケーションがトレンドなので「それがいいね」とまとまった次第です。

そして、これがヒットしました。2023年に行った初回は小さめの会場で行ったために立ち見が出て、翌年からは京都府医師会館で最も大きい会場に変更。2025年9月に行った第3回では7人の指導医がそれぞれ、「高血圧」「老年医学」「抗菌薬の副作用」などを学び直しのテーマに据えてプレゼンし、100人ほどが来場されました。プレゼンの模様はライブ配信しており、ウェブでの参加者も回を重ねるごとに増えている印象です。

――プレゼンする指導医の人選はどう行っているのですか。

私が担当しています。臨床研修屋根瓦塾KYOTOの活動と同様にこちらも多様性を重視しており、大学に所属していない先生や開業医の先生などにもお声がけして、所属や診療科、性別が偏らないようにしています。その上で、教育熱心かつプレゼンが上手な先生にご依頼しています。テーマは「最強の人選」。私の周囲に魅力的な先生を知っているハブとなる先生が多くいるので、ネットワークをフル活用しています。お願いする際は私と松原先生が一人一人に企画趣旨や留意点をご説明するようにしています。結果、つまらないプレゼンは過去に一つもなく、どれも本当に面白かったですね。

先に話した通り、若手医師ワーキンググループはボランティアに近い有志の団体だったのですが、2025年10月に「屋根瓦ワーキングチーム」と改称し、正式に医師会の組織となりました。10年近くにおよぶ私たちの活動を評価してくださり、うれしく思います。

◆堀田 祐馬（ほった・ゆうま）氏

2008年京都府立医科大学卒。市立福知山市民病院に研修医として勤務した後、松下記念病院消化器内科医長を経て2021年に京都第二赤十字病院に入職、2022年から同院消化器内科医長。京都府医師会では2021年から理事を務める。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索